
ANGEL&HUMAN

fuki

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ANGEL HUMAN

【Zコード】

Z4608U

【作者名】

f u k i

【あらすじ】

夏休み初日の夜の世界、平凡な人間は天使と出会う。

だが、己の持つ天使のイメージと反して自己中、破廉恥、我が儘の三拍子が揃っていた俺様天使だった。よく「淡泊」と言われている人間こと高校生の私ですが、そんなキャラ設定も放りだし「天使のイメージを返せ!」そう叫びたくなった夏の日の物語。（転載、それいけ魔王さま!と雀の涙くらいリンクしますが単品でも読めます）

ありがとう、優しい世界

「大勢の人が死にました」
だなんて、自然の破壊者が減つて良いことだと私は思う。だけどその反面、酷くやるせなくて大きな声をあげて泣き出したいのもまた事実。ああ、なんというパラドックス。

トーストを囁りながらボタンを押すとテレビの画面が暗黒を映しじんわりと苦い味が口の中に広がった。

その日はちょうど夏休み最初の夏の真夜中のことだった。

祖父母が前に住んでいた古家で過ごすことになった私は、夏休み初日に宿題を少しでも早く終わらせ、
復習をしなければという一種の責任感を背負いながら青い数学のノートをあけていた。

しかし、あまりにも多い問題に大きく溜息と悪態をつき即座に諦め、
飛んでいる小さな羽虫の隙をついて机におかれの少し古びて薄く埃を被っている電気スタンドのスイッチを回そうと手を伸ばす。

私は見つけた。

開けていた窓の桟に満月の光の雫を纏つて座っていたそれを。

そよ風がそれの髪をふわふわと揺らす。トルマリンのような翠色の瞳を猫のように細めると、うつすらと笑みを浮かべ、口を開いた。

「よう、人間。俺様は天界の天使だ。少しの間だけこの世界で置え。
ちなみに拒否権は無え」

「・・・・・」

・・・取りあえず、すぐにカーテンを閉めた。

いやはや私はどうやら疲れているようだ。昨日終業式の後に慌ててこちらに来る準備して不便な古家で生活をし始めたからに違いない。
・・・ついに幻覚とやらを見るようになるとは。

くらつとする身体を必死に押しとじめ手で目をこすった。それから5分くらい経つ。ただろうか、いざとなつたら警察を呼ぼうと変な意を決した私はカーテンの端を掴んで勢いよく開けてみた。

ざあっとレールがこする音がしていつでも逃げれるようひと歩足を下げる、のだけれども。

「・・・あれ。」

ただ夏の夜にふさわしい光景が映つていただけだった。なるほどこれが白昼夢。いやに納得してタオルケットの中に頭ごと私は潜り込み身体をまるめるようにして眠った。

のちになつて、なぜこのときちゃんと警察を呼ばなかつたんだらうと後悔することになるなんて私には知る由もなかつた。

翌朝、蝉の鳴き声によつて起された私はようよと立ち上がり、障子を開け、縁側に出た瞬間に口をあんぐりと開けたことになった。私の混乱の原因は、ふわふわの金色の髪を揺らしてこすりを向いてから口を指さした。

「垂れてるぞ」

「…………」

とりあえず、寝惚けた頭で現状把握する前に袖で口を擦るように拭くと昨日見たそれ、即ち自称天使不法侵入者は端整な顔をニヤリと歪め冗談と宣つた。

あー。こんな昨日、白昼夢で見た気がするなあ・・・。つうか、何こいつ。え、なんでここにいんの？

不法侵入？ありえなくね。ああそれともまだ寝てんのか私。

無意識に私が半眼で睨むと、不審者はきょとんとした顔をしてからケラケラと笑つて縁側に座り込んだ為に私の眉間に皺がよつた。

「何で此処にいるかつて思つてんだろ？感謝しろよ人間。なぜなら天使である俺様がわざわざ人間の目の前に降りてやつたんだからな」
「…………」

とりあえず私はだんまりとしたまま、そいつの横を通り洗面台に向かうことにした。鏡に映つた自分を無心に眺めてから、蛇口をひねつて水を出し、両手で零さないように水を溜めて、顔へと押しつけると冷たい水に肌の毛細血管が縮まつてぴりりと反応をみせた。

冷たさに段々ぼやけていた頭がすつきりと晴れていく。

ふわふわのタオルで残った水気を吸い取り、ふつと溜息をつくと突然耳元で声がして思わず眼をあけて飛び上がった。

「へえ。水つてそんな細つちろいもんから出でくんだな。人間、何でこんなものから水が出てくるんだ？」

ぱっと避けるように身体を後退させつづ振り返ると子ビモのよくなきらきらと輝いた翠色の綺麗な瞳と田があつた。その瞳は今度、興味津々な様子で元は銀色だつただろうが今は鉛色の蛇口へと滑らされた。

あれ、なんかいる。つか何この人本物？あー、さつきのマジもん？めんどくさいな・・・なんだ、まずは警察？それとも精神病院？

私は、朝のテンションの低さも相まって何か色々と諦めた。見た目は麗しいこと限りないが不法侵入者が吐く嘘に俺様つて天使なんだぜ！つていう選択肢があるんだとか、アンタみたいな天使はいてたまるかとか、私は全てを諦めた。

女は愛嬌。だけどお前はそんなんないから度胸でどつにかしら。そんな言葉を神から告げられた気がした。

蛇口のコックを捻つて水を止めるところに興奮じだした。自分でその興奮を抑えているようだが抑え切れていない。手をだしたりひっこめたり。なんというか、その、言い方は悪いが、身悶えているよ

うな感じだ。

正直その顔で身悶えないでほしい。服もローマ風味だしマジ変態にしか見えん。

私は大きな溜息をわざとつき、可哀想な人を見る目でそいつに顎でしゃくって蛇口の方を指し許可をだすと待つてましたと言わんばかりに嬉々としてコックを捻つた。

勢いよく水が飛び出してきたので一瞬慌てた様子だったがもう一度、捻りなおし水を止めた。それを5回繰り返したくらいで私は水道代がかかると思いコックを奪い捻つた。非常に嫌そうな顔をされたがそんなの知らん。

この不法侵入者、相当蛇口見るの久しぶりだつたのだろうか・・・？

「んで人間、人間は今から何をするんだ？」

不法侵入者は私の後ろを大きい犬のようについてきてはそう問いかけてきた。私はいつも朝にパンを食べると、すぐに机へと向かう。もちろん此処に来てからだつてその習慣を変えることはない。

あんたは淡泊だね、と言われるのはもう慣れた。

鞄に仕舞つておいた勉強道具を取り出すと、不法侵入者は鼻で笑つてから木目の長いものを使ってできた縁側に座り込み手入れが行き届いていない庭の小世界を眺め始めた。

そんな様子をちらりと視界に入れてから私は目の前の課題を終わらせることに専念したが、あいつの方に気が行つてしまつ。

それはそうであろう。だつて不法侵入者だ。実はナイフを隠し持つていて、後ろからぐさりなんて落ちも考えられるからだ。この古屋に金目の物なぞない。まあ、その時になつたらその時考えればいい。

・・・別に生に執着してゐる訳でもないし死を望んでゐる訳でもない

といふか実際、古屋に移つてから時折近所の人とかがいつのまにか家にいて寬いでるくらい田舎だし。ぶつちやけ田舎つへは不法侵入者には慣れているんだ。

そういうえば、この古家の主であつた祖父もそこに座つてゐるのが好きだつたような気がする。

小さい私は、祖父のじいじのつな膝の上に乗つては、一緒に小世界を眺め、こつそりと祖父を見上げるのが好きだつた。いつも祖父は気づいて私に視線を下ろし、田尻の皺を寄せて優しく眼を細め柔らかく微笑んでくれたからだ。 酷く温かい空氣にくるまれてた。

シャープペンシルを走らせる手を少し緩めながら、不法侵入者の背中に、あの優しい空氣を感じ取つた直ぐ後に訪れた現実で疑問に思つたことを何となくぶつけてみた。

後から考えてみると、

初めて会つたのにどうして聞いたんだろうつて不思議に思つた。で

もさうと、じこいつの纏つてる雰囲気がどうか、違つてこると、無意識に感じ取つていたのだろう。

「……生きていた、その時までが苦しいのか、それとも死ぬ一瞬が苦しいのか。どうだと思つへ？」

それは、生きている限り付き纏ひの永遠の謎

（答えを得ることが出来るのせ、最期の一瞬だけで）

「人間にとつての永遠の謎だなそりや。悪いが俺様は死んだことがないから答えられねえ」

不法侵入者はこっちに背を向けたまま答えた。

そつと開いている襖の向こう、もうその答えを見つけた人の枕元で、身動きもせずに座っていた祖母。何かを咳き、両の瞳を閉じた祖母。縁側に座り込んで小綺麗な小世界を眺めていた私と誰かの世界の終焉を意味するかのように風鈴の静かな音が響いていたような気がする。

風に乗つて微かに届いた、あの祖母の咳きは一体なんだった・・・?

そこで思考を中止させ、頭をふった。

「そう」

興味なさげに、そう返答をすると、何か「ちやーちやー」と喚いたが私は、ひたすらに課題と闘い始める。・・・というかこの不法侵入者いつ家に帰るんだろう。

手元が夕焼けの朱色の光りに照らされ、顔をあげてみるといつの間にか、縁側に座っていた不法侵入者は何処かに消えていた。

開けっ放しにされている障子から入り込んだ夏の風が髪を微かに揺らし、私はシャープペンシルを机に放り投げて畳の上で大の字になつた。

あぐびと一緒にイグサの香りを胸一杯に吸い込む。

イグサの香りには沈静効果があるらしい。障子の遠く向こうの夕焼け色に染められた森が、さわさわと梢を揺らす景色に尖っていた気持ちが和んでしまつた私は寝てしまおうと思つた。

蝉達の不規則なお喋り。

久しぶりにゆっくり眠れるかも

自然とおりた目蓋の裏側に広がつた暗黒の中に私は溶けていった。だが、ふいに意識が海の中から上へと浮上するように戻ってきた。

私がゆっくりと眼をあけると辺りは真つ暗で殆ど見えなかつたけど、またいつの間にか居た金色の不法侵入者の居場所は、灰色いや、むしろ銀色の霧のような光にボンヤリと包まっていた。思わず渴いた

喉を小さく震わせ言葉を紡いだ。

「・・・本当に、天使なんだね」

「あア？今更何言ってんだよ」

「頭がいかれた不法侵入者かと思つてた」

「いかれてんのは人間の頭だろ？が

ほんやりとした視界の中で不法侵入者は私を覗き込んで笑いを零した。昔読んだ絵本の天使もこんな表情をしていたような気がする。不法侵入者じゃなくて天使の翠色の瞳に酷く無表情な私を見つけた。

とりあえず、私が今言いたいことは一つだ。

「邪魔」

「・・・・ふ、育ちがなつてねえな。人間」

「うつさい。あんた何様？ああ、何様俺様不法侵入天使様兼居候様
だつたね」

性格が著しく悪い天使はぴくりと顔を歪めた後に何を考えたのか、ちょっと笑つて私の顔のすぐ横に手をつき、あいつが持つてゐる唯一天使らしい端整な顔を近づけてきた。

頬に金色の綿飴のように柔軟な髪が滑つていく。

碧色の中に見える翠色が細められ凄艶な薄い笑みを湛えつつ、白くて長い指を頬に滑らせていく、ふいに温い吐息が耳を擦り、ぴくんと私の体が小さく跳ね背中に何かが這い上がるような感覚に拳を握つた。

「気づいてやらなくて悪かつたな。期待通りに思う存分可愛がつてやるよ」

耳にふれた囁いた唇は、ひんやりとしていた。
ちなみに、この世は己自身のものであると同時に己以外のものである。己と己以外が融合して出来てている世なのであるから、予想外のこと陷入るといつことは至極当たり前のことであろう。

まあつまりは異世界の天界とやらにいただらうこのピッカピカな天使の考えが分からぬといつことだ。

私はついに変態天使の奇想天外魔訶不思議理解不能な発想能力に対して閉口した。気づいてやれなくて悪かつたなとは何だ。失敬な。私は普通で健全だ。本当に、この金色天使は馬鹿だ。馬鹿で俺様で破廉恥以外の何者でもない。

あれだ、もうこれはあれだ。色々ひつくるめて俺様天使と呼ぶことにする。とりあえず、私の天使に対するイメージを返せ。

「もう一回言つけど、邪魔。今すぐどかないと強制執行するから」

「あア？ 聞こえね、ツツテええエエえ！ 」
「・・・だから言つたじやない。強制執行するつて」

私は冷めた眼で畳の上で大事な所を押さえつつ、のたうち回つて俺様馬鹿天使を見下ろした。蹴り上げれないとか思つてたけど案外

やれるものである。

百獣の王ですら射殺せそうな鋭い眼で睨み付けてきたが翠色の両眼に涙を浮かせながらの睨みなんて怖くない。俺様天使から視線をふいと外して電気のスイッチを探す為に壁に手を這わせた。

パチンとつけると暗闇に慣れた瞳が悲鳴をあげる。

・・・俺様天使かなんかの悲鳴も聞こえたけど。さらにどたんどたん音がするけど。きゅっと眼を瞑つてからだんだんと光にならしていく。

私はうーんとのびをしてから脱いでおいた上着を羽織り視線を下におろしてみるとようやく俺様馬鹿天使はのたうち回のをやめた。

「人間如きがア・・・ツ」

「はいはい。私お腹すいたから手伝ってくれない?水道の他に新しい色んなもの見られるけど」

「・・・・・今すぐ連れて行け!」

俺様天使は今にも私に掴みかかるうとしていた手を引っ込め腕をわきわきさせつつ、破顔一生した。こんな単純で良いのか・・・?

思わず台所まで歩く中、足の裏に伝わるひんやりとした冷たさに笑つたのは自然の摂理であろう。台所の戸棚の中から一人暮らしのお友達、三分簡単クッキングのインスタントカップラーメンを取り出してフタをあけつつ俺様馬鹿天使 もう面倒だから俺様と呼ぶを呼ぶと、

俺様はひょっこりと後ろから私の手元を覗き込んできたが私は別段気にせずにポットのボタンを押した。

じゅぱぱぱー・・・

お湯が容器の中に注がれる音が静かに響いた。

「いやいやいや……なんでそんなもんから水が出てくんだけや？！」

「水じゃない。お湯」

「じゃあ何でそんなもんから湯が出てくんだけよ。そもそも詠唱もないとか一体どんな魔法だ！今朝見たのといい、ありえねえだろ！お前実は高位魔導師とかじやねえよな？！」

「……いや、意味分からぬから。これ電気で動いてるから。科学の進歩だから」

・・・・・アンタ頭大丈夫？

その言葉を言うのをグッと全力を注いで我慢して出来上がったラーメンをズズズズ、と瞬つて食べていたがその間俺様は瞳を輝かせポットを上下左右からぐるぐると観察していた。

カップの中身がからつぽになつてから、そつこえぱ。と口を開いた。

「夕飯欲しい？」

「聞くのが遅えな」

「・・・欲しいのですか」

「ふ、俺様は天使様だからな。人間が食つものなんぞいらねえ。まあ、どうしてもって言うなら食つてやつてもいいぜー。」

「ああ、何かこいつ相手にするの、めんどくせこ・・・。そう私は独りじゃた。とりあえず腹が立つたのでスルーすることにする。鬼とか言つくな！」

「はい、これタオル。シャワーの使い方教えるからこいつち来て」

「シャワー？」

「あー・・・、水浴び・・・？」

水浴びだよな？と有耶無耶に返事をしてお風呂場突っ込んだら歓喜に満ちたような悲鳴が風呂場から聞こえたけれども、

・・・そして、さつと布団でも敷いておこつた。

見れる、言わざる、聞かれる、である。

晴れ晴れとお風呂からあがつた俺様を取りあえず客間の布団に押し込んだ次の朝。

ぴぴぴ。

鳴った時計を止めると眼を解すマッサージをしてから首を回した。大分肩がこつてゐる。同じ姿勢でずっといたからかな。

適度に冷えた麦茶で喉を潤して縁側を私は見た。縁側は俺様の定位置だぜとでも言つように俺様天使は縁側でごろんと寝つ転がつている。

はは、その白い肌が紫外線にやられてしまえ。

朝から散々ひつひついて、やることなすことに質問しつつもじいいつと視線外さないし勉強を始めた途端に今度は清眠ですか。

俺様天使の顔を覗き込んで見ると、あの綺麗な深い翠色の瞳を縁取る長くて艶やかな睫毛が風に揺れている。ふつくらとした唇は緩やかに閉じられていて、思わず白雪姫を思い出した。

・・・女として男に負けるつて何かむかつくんですけど。

もつ一度机に置いてある時計で時間を確認した後、私は玄関へと足を向ける為に俺様天使の横を通り過ぎ去りました。

が、足を何かに掴まれてその場を通り過ぎ去ることは叶わなかつた。パツと足下に視線を向けると白いしなやかな手が私の足を掴んでいた。白い手の持ち主は、にやにやと面白そうに眼を細め私を見上げている。

「どこに行くつもりだ？」
「・・・寝てたんじゃないの？」
「さあなア？で、行き先は？」
「・・・」近所のおじいさんの所だけ
「仕方ねえから俺様も行つてやるよ」

掴んでいた手を離し、俺様天使は身を起こし欠伸をもらしながら、んーと伸びをした。そんな様子を見ながら私は、はたと考えた。

この俺様天使は性格は天使といつイメージを崩すような俺様で、破廉恥で変態である。だがしかし、ルックスだけは良い。本当にルックスだけは。正直ルックスと光輝くあのオーラだけが彼が天使であることの肯定しているくらいだ。

そんな彼をこのままで行かせても良いのだろうか？道ばたで人に会つたら騒がれないのだろうか。

じろじろと眺め回してみると、じゃらじゃらとしたアクセサリーに綿のような光沢があるまるでローマ時代のように生地を羽織つだけのような異国の服。

明らかにある種の変人である。

「・・・ねえ、他の服ないの？」

「あア？なんか文句あんのか」

「一言でいうなら似合つてるけど、変」

「へッ、変だと？これだから人間は視野が狭いんだ。まア、仮に入間の言うようにこの服が変だとしても、俺様が着たらその服は全てにおいて至高の物となるがな」

「じゃあ腹巻き一丁も、かぼちゃパンツも、割烹着もあんたが着たら超似合つんだぜってことね。分かつたから早くその服を着替えて。そんな奇天烈な服着てる奴とは隣を歩きたくない」

「じゃ、服を俺様に献上しろ」

私は思わずぽかんと口を開いて振り返ると、偉そうにふんぞり返っている俺様天使が眼に入った。

「おじこちゃんのだけど、まあ良いよね」

いそいそと服を包んでいた薄葉紙を置んではいるが、男物の浴衣を着た俺様天使は不思議そうに裾を引っ張つたり帯を突いてみたりした後に、その場でぐるりと回つて見せた。

「流石俺様だな。どんなものでも着こなしてるぜ」

「・・・着付けてあげたのは私なのを忘れないで欲しいんだけど」

「こんなもん羽織つて縛つてで終わりじゃねえか」

「・・・」

ほとほと呆れた顔をしたあとに私は閉口した。何も言つまい。この
いつタイプはシカトするのが一番である。薄葉紙を小さな戸棚の上
に置き、片手をついて立ち上がった。

戸締まりをしに台所へと先ず足を運び裏口の鍵を閉めた。こんな田
舎に空き巣なんて出るのかな。

そんなことを想いながら玄関へと辿りつくと俺様天使が壁にもたれ
かかって立っていた。

「遅え」

「うつさい、じゃあ手伝ってくれれば良かつたじゃん」

「ハツ！俺様を使おうってか？」

「・・・天使様はお優しい方だと思つていましたので何も言わずと
も手をさしのべてくれるかと思つっていました。私の一方的な勘違い
でしたねアハハハ」

ひくひくと口の端を震わせて言つと、何を思ったのか俺様天使は手
を出してきた。

意味が分からぬ。じと、とその手を見てから俺様天使に視線を向
けるとどこか真面目な表情を浮かべていた俺様天使と眼があつた。
ヤツは自信満々な笑顔を浮かべる。

「ほり、手をさしのべてやつたぞ」

「・・・一度その壁で頭ぶつけてみたりビツ？」

「俺様にはそんな嗜好は無い」

くらりと倒れそうになつた私は取り敢えず思考がどこかぶつ飛んで

いる俺様天使をスルーすることに決めた。サンダルを足に引っ掛け
て靴箱の上の小さな藁籠の中からうさぎのキー ホールダーがついて
いる鍵をひっぱり出す。

「行かないの？ ねえ、早くしてよ」

動く気配のない俺様天使に私は訝しみながらじろじろ眺め回し、足
下に見た瞬間ああ、と合点がついた。

「そういえばここら辺に」

靴箱の奥から下駄を取り出すと、埃が舞い少しだけ咳き込んだ。下
駄を足下に置いてあげると、俺様天使はきょとんとした顔で私を見
下ろしてきた。

「大きさが合うか分からないうけど、どうぞ」

「・・・あア」

俺様天使は、おずおずと下駄に足を滑り込ませた。まあ許容範囲か
な、と私が頷いて見せると俺様天使が、ちょっと眼を見開いたよう
な気がした。

森の中の小道を一人して歩く。おじいさんの家には私しか道を知ら
ない為に俺様天使は大人しく隣を歩いている。

彼方此方と煌めく俺様天使のふわふわな髪に気づいた後、上を向い

て私は木々の間から零れ落ちる優しい光に瞳を細めた。ゆらゆらと、葉も小石も木も砂利も色を変えていき風が軽やかに駆け抜けて行く。

バサリと音をたてて鳥が空へと羽ばたいて空へと消えていった。

「良い所だな」

ふと口を開いた俺様天使を見上げると、ほんわりと温かい光が翠色の瞳の奥に浮かんでいて思わず呼応するように私も小さく笑った。そして言葉を舌にのせるようにして音にする。

「国破れて山河あり、城春にして草木深し」

「何だそりや？」

「ずっと昔生きていた杜甫っていう人が書いたの。国が戦に敗れたけれど、山河はある。そして、春が訪れて崩れ落ちた城壁の中には草木が茂み始めている。って意味。自然是循環し続けるってことかなつまりは」

「へえ」

「今ある命を奪つて血で染まつた大地からまた新たな命が芽吹くんだよ。それって、凄いことだと思わない？」

争いにより森が焼かれ、空がくすみ、川が汚され、動物が殺され、大地が血に染まつたとしてもその赤い大地からまた新たに小さな種が芽吹き、大樹へと成っていく。

そしてまた森は静かに形成され、空は澄んだ色を取り戻し、川は清らかに流れていき、動物が集まつてくる。赤は緑に抱かれ、生命力に満ち溢れる。

「・・・あア、そうだな」

落ちている幹を踏んだ為にバキリと足下で音がした。

「清秦おじいちゃん、こんにちわーー！」

朝顔の縁のカーテンのよくなっている柵の間から顔を出して私は大声をあげた。清秦おじいちゃんは近所に住んでいる「高齢のお方である。

中から、庭にあるよ。入っておいでーという声を聞き取り私はお邪魔しますと一言呴いてから裏庭へと足を進めた。

すると、縁側で田向ほりこの真つ最中の清秦おじいちゃんを見つけた。茶色の湯飲みを手の中に收めながら、清秦おじいちゃんは一口一口と笑っている。

「清秦おじいちゃんこんにちわ

「おお、こんにちわ。そろそろ来る頃かと思つておつたわ

「今日も良いお天氣だね

「わづだの～

朗らかに笑う清秦おじいちゃんに私もほわほわとした感じで笑顔を返すと眉を寄せた俺様天使が割り込んできた。

「なんだこのジジイ」

「なんだじゃないでしょ！が！しかもジジイって呼ばないのー。」

「あア？文句言つてんじゃねえぞ」

「こなんのお馬鹿ー。」

どこか機嫌が悪そうな俺様天使を睨め付け、清秦おじいちゃんに申し訳なさそうに頭を下げる。と氣にせんでもええよ。と言つてくれた。ぽんぽんと自分の隣を叩くので私は意図を察し、そこに腰をかけると清秦おじいちゃんは俺様天使の方も見て、同じ動作をした。

俺様天使は、理解が出来ないといつも顔をしたが私が腰をかける動作を見て、渋々とそこに座つた。そして近くにおいてあつたお盆の中の紙包みの中から様々な色彩の可愛らしい金平糖を手の中に落とそうとしてきたため、私は慌てて両手で金平糖を受け止めた。

「ふつと可愛いらしい金平糖が手の中で転がつた。

俺様天使も私の手の中を覗き込んで、色鮮やかな金平糖に瞳をきらめかせた。

「おいジジイ！これなんだ？」

「こらー！清秦おじいちゃんでしょ！がー！」

「んじゅア、清秦のジジイ！これなんだー？」

分かつていない、と肩を落とすと清秦おじいちゃんは楽しそうに笑みを零していた。清秦おじいちゃんが良いなら別に氣にしなくとも良いのかな？そんなことを思つて私は注意しようとした口を閉ざし

た。

「ほれ、おぬしも手を出してくれぬかの？」

パツ、と出した俺様天使の手の中にも金平糖がゅつくりと落とされた。黄色の金平糖を一つ手に取り俺様天使は色々な角度から眺めたあと最後に空に翳してみると、きらりと光を受けて金平糖が煌めき、きょとんとした顔でこちらを覗き込んだ。

「・・・ちんけな宝石かなんかか？」

その言葉に思わず手の中の金平糖を落としそうになり心臓がどきりとした。そうだった！こいつは非常識な俺様馬鹿天使だった！

ドキドキする胸を必死に抑えながら清秦おじいちゃんを横目で伺つたが、清秦おじいちゃんは相変わらずにっこりしてるので特別なんら困惑いなどを見せてはいなかつた。

「金平糖を知らんなんだか。ほれほれ、見ておれよ

そう言つて清秦おじいちゃんは私の手の中から白色の金平糖をつまみあげ、自分の口の中に放り込んだ。

俺様天使を見上げてみると、愕然とした表情で清秦おじいちゃんを見ていた。ゆるゆると視線をさげ俺様天使の手元を見てみると、手の隙間から金平糖が2、3個零れ落ちていつている。

「人間つてもんは宝石を食うのか！？」

身を乗り出して、くつてかかる俺様天使に清秦おじいちゃんはから

からと笑い、ほれおぬしも食べてみたらどうかの？と食べるのを勧めていた。

俺様天使は、掌の中にある金平糖を親の仇でもこうよつて長い間睨み続けたかと思つとけりつと私を見てくる。

「うん、食べたら？ 美味しいよ」

そつまつてピンク色の金平糖を口の中に放り込むと程良い甘さがふわりと舌の上で広がつて思わず頬を緩めた。こねこねと口の中で転がし溶けていつた頃に意を決したのだろうか、俺様天使も金平糖を一つつまみ上げ匂いを確かめ、口の中に戦々恐々と放り込んだ。

「・・・・・甘い」

「セリヤセリヤ」

砂糖菓子じやからな、と茶田ひ氣たっぷりでウインクを受けたにも関わらずヤツは黙々と手の中の金平糖を平らげていき、もうじきもじきと口が動いていく。

「清春のジジイ、俺様はこの金平糖とやらを氣に入った！」

「そりかそりか」

そんな会話に耳を傾けながら自分の金平糖を私は食べていたら、すつと横から手が伸びてきて私の残っていた金平糖を搔つ攫つて行つた。なにしやがるんだ。食べ物の恨みは恐ろしいとしらないのか。

むつとして睨み付けたが「貢ぎ物だ」とのたまるどりの天使とは違つて優しいからその暴虐な振る舞いを許してやることとした。

三人でどうでも良い日常的な話を続けていると奥の部屋の方から何か坪を打つような「ローンローン」という重い音がした。

「おやまあ、もうこんな時間に」

「何の音?」

「時計の音じゃよ。5時になると鳴るようになつておる」

「夏だからかな、5時なのにまだこんなに明るい。・・・お暇するよ」

未だ赤に、夕焼け色に染まらない青い空を見上げた。大きな入道雲が風に吹かれてゆつくつと空をわすらつしていく。

私の言葉によつこらせ、と清秦おじいちゃんは立ち上がり奥に入つていつたと思つたら顔をひよつこり出して俺様天使をちよいちょいと手で呼び寄せた。金平糖で餌付けられた俺様天使は面倒臭えといながらも素直に下駄を脱ぎ奥に入つていつた。

私は足をぶらぶらさせながら一人が帰つてくるのを待つた。

「これ一体なんだよ? 卵か?」

「今夜になれば分かるじゃねつて」

「はア? ワケ分かねえ」

声がする方を振り返ると、緑色に黒いすじが入っている丸いものを俺様天使が両手で抱えていた。

「スイカ？」

「偶々知り合いから貰つたからの、お裾分けじや

「え！いやいいよ！」

顔の前で手を左右に振ると清秦おじいちゃんは困ったように笑つて皺の寄つた手で私の頭をよしよしと撫でた。温かさを感じて思わず私は眼を細め俯いた。

「実は、2個貰つて困つてたんじや。一人じゃ食い切れんしの

自分の為に貰つておくれと言つた清秦おじいちゃんに私は、ぎこちないながらも頭を下げ感謝の意を告げた。俺様天使が脱ぎ捨てた下駄に足を通して庭へ降りてきた。

「んじゃアな、清秦のジジイ」

「ちょっと先行かないでよ！清秦おじいちゃん、スイカありがとう！次、何か持つてくるからね！」

慌ただしく飛び出して行く姿を見て清秦は、口元に柔らかい笑みを浮かべ、祈るかのように両手を合わせ瞳を閉じた。

「いつでも来なさい、ぜひ尊いお方もこ一緒に

寄り道もせず古屋に帰った時には陽が沈みかけて世界を夕陽色に染めていた。

私は俺様天使にスイカを持つているように言付けた後、縁側を通り、古い倉庫の前で足を止めた。

建付が悪くなっているのか、扉が中々スマートに開かない。両手を使つてようやく開けると、ぎしりと扉が叫んだ。

薄暗い中を夕陽の光を頼りに目当ての物を探して視線を彷徨わせたが中々これが見つからない。仕方無く諦め種を返すと、俺様天使がスイカを手に縁側から顔を出していた。

「・・・スイカ置いたら？」

「人間が持つてろつて言つたんだろうが」

いや、確かにそつは言つたけど、そういう意味じゃないんだけど。スイカを我が子のように大事そうに抱いている俺様天使に私が眉に皺を寄せてると、俺様天使は倉庫に近づいて來た。

「何やつてんだ？」

「ちょっと捜し物。でも暗くて見つからなかつたの」

「へえ。んじゅアほらよ

俺様天使はスイカを片手に持ち直し、人差し指で宙にクルリと円を描くと、段々と白い靄が渦を巻くように指近くに纏わり始めた。きよとんとして呆けた顔をしつつも凝視したその指がパチンと一度弾かれたと思ったら優しい光が倉庫の中を照らした。

私が思わず、へ?と間の抜けた声を出すと俺様天使がクク、と喉で笑つた。

その笑いにムツとして見上げると俺様天使が私の額目掛けてチヨップを喰らわしてきた。

「ブツサイクな顔だな」

「うつさい!アンタが異常なだけでしょ!」

「僻みか?」

「・・・・・で?何この光」

意図的にスルーしたのに気がつかないのか俺様天使はそのまま素直に言葉を紡いだ。

「精靈だ」

「・・・は?」

「あア?だから精靈だつて言つてんだろ?が」

「ごめん、なに?」

「ふざけてんじゅねえぞ人間」

「だつて精霊つて！精霊つて何！なんでそんなにもファンタジーなわけ！」

「ハツ、これだから人間はいけねえな。眼に見えるものが全てじゃねえんだ。人間は自分が見えてねえからって他人のそれまで否定すんのか？まつたく人間はバカまるだしだな」

「バカはアンタでしょうが！というか天使だとか精霊だとかもう本當なに、なんでそんな・・・ああもう良い、うん、良いよ」

私は取り敢えずもう考えるのを放置して無理矢理自分を納得させることにした。

だつて本当に光つてるんだから！！眼に見えないものは信じない、それが人間だけど眼に見えちゃつたんだもん。流石に非科学的でも認めざるを得ないでしじうが。

精霊だかなんかの光を借りて、私は探し物を見つけた。

上から覗き込んで分かるくらい埃が被つているが意を決してその探し物、木製のタライを引っ張り出した。よつこらせと地に置き倉庫を出てから両手を見てみると埃で灰色になつていた。

「ありがと、見つかつた

「ん。お前らもご苦労」

俺様天使が光に向かつてそう告げると、優しい光が霧散して消えていった。思わず凄いと呟いたが、頭を振りタライへと意識を戻した。

さて、これ洗わなきゃ・・・。

「ね、あそこにある水色の棒みたいなのが見える?」

「あれか?」

「そ、それを持って前に見せた蛇口ひねってごらん?」

スイカは私に渡してね。と言つてスイカを受け取ると俺様天使は水色の、つまりホースを手に取り、中央に開いている穴を不思議そうに覗き込みながら蛇口をひねつた。

ホースと蛇口。普通の人だつたら蛇口をひねつた時にホースを覗き込むなんてそんな非常識なことはしないだろう。けれど、コレは非常識の塊である。予想通りの展開になつてしまえ。

「ぶつへえ!」

「ふつ、こ、こ、れがみ、水も滴る、ひつ、良いおと、こつてやつ
!?」

変な声をあげて飛び上がつた俺様天使の様子を見て私は必死に笑いを堪えるようにスイカを持った手で腹を押された。予想的中である。いいざまだ。俺様天使はホースから噴水のように溢れ出る水を呆然と眺めている。

ボタボタと髪から大量に滴り落ちる水が俺様天使の端整な肌を伝つていつた。

「びびつた・・・」

呆然とした顔でぽつりと呟いた俺様天使の一言がその一言を現実に物語っているように若干聲音が高めだったのに気がつきとつとう我慢しきれずに入浴を開始した。

「笑うんじゃねえ人間！」

白陶器のような肌を若干朱に染め、きやんきやんと吠える俺様天使に腹がまたよじれそうになつたが腹に力を入れて幾度か死にそうな感じで深呼吸をしたら笑いによるひくつきがとまつた。

スイカを下にそつと置く代わりにタライを手に取り俺様天使の元へと行った。

「はい、タライに水かけて。」

不機嫌さを表すように雑にタライに水をかけ、私が拭くという作業を何回かした後、綺麗になつたタライに水を張り、スイカを中にそつと沈めた。

スイカの重さに水がその分だけ溢れ出て、渴いた土が湿り気を帯びた。

「何やつてんだ？」

「ハヤハヤして冷やしておくれ。風流でしょ？」

びしょぬれのくせに興味津々にタライを覗き込む俺様天使を目に入れてからお祭りとかに連れてつたら面白いんだろうなコイツ。だなんて思いながらサンダルを脱いで縁側へと上がった。

ペちゃんこになった髪の毛から滴る雫が頬を滑つて鬱陶しそうに左目をこすった俺様天使を一度振り返つてから急ぎ氣味に早足で廊下を蹴り、風呂場の木製の引き戸をがらりと開けてから棚へと手を伸ばし一番上に仕舞つておいた柳行李の中の物を一つ拝借して縁側へと戻つた。

タライの中のスイカを軽く叩いていた俺様天使に私はわざわざ持つてきたタオルをぶん投げようとしたが、途中で落下するのは目に見えていたから手招きをして近づいてきた俺様天使に嫌がらせの如く覆い被せた。

「ほら、これで拭いて」

「ぶふえ」だか「おふえ」だか良くわからない声にニーンマリと隠れて笑つた。ちなみにさつきから嫌がらせをしまくつているのは別に金平糖をとられたという食べ物の恨みではない、決してない、断じてない。さて夜ご飯作らなきやつと。

「タオルで拭いてから上がつてね」

「あー・・・、あア」

踵を返し背を向けていたが、口籠もつた俺様天使に気がついて振り向いたけれども何でもないと首を振られたから気にせずに足を廊へと向けた。

「精霊使えばこんなもんスグ乾くのにな」

さっきの落ちなかつた言葉が誰も居なくなつた庭先でするりと零れ落ち、一人の不遜な天使はふかふかのタオルにぽふんと顔をうずめ、ふわりと香る優しい匂いに力を抜き息を一つ吐いた。

その頃私は、ガスの元栓をきゅ、と閉めて流し台に置いておいたザルの中に鍋の中身、白い糸のよつな素麺そつめんを流し込んだ。それを冷水で冷やしてから、平皿へと盛りキュウリ等の野菜を小さく添えた。

手を拭いてから、お盆を持ち上げ居間へと歩みを進めると、縁側へと繋がる廊下の角からぼんやりと光が行き場を探しているように漂い、見え隠れしていた。

縁側で食べるつもりはないんだけどなあ。お盆の上にのせられてい
る一対の赤茶色の碗とお箸に視線を落とした後ふうと息をつき、居
間へと向けていた足をその光のもとへと方向転換した。

角からヒョウコロと顔を覗かせると、足音に気がついていたろう
俺様天使が、静かにこちらを見上げていた。

「(1)飯できたよ」

ふいに翠色が瞳の中で揺らめいたけど、それも私が瞬きを一度する
とすぐに消え失せた。気のせいだったのかな？私の頭一個分よりも
背の高い俺様天使を見上げると、お盆の上のやつめんを見下ろして
ヤツはニヤリと笑った。

この笑いは絶対バカにしている顔である。そつめんの何が悪い。お
手頃なんだぞ、作るのも値段も。

暗い中、斜め前を歩く俺様天使に私は沈黙を破るように口を開いた。

「そういえば四六時中光ってるけど、それもまさか精霊だとか言わ
ないよね？」

「仕方無えだろ。払つても払つても俺様から離れたがらねえんだか
らな。・・・つうか人間のくせによく分かつたな」

「うっさいわ。そつちの世界じゃみんなそんなに光つてんの？」

「あー・・・、外界の連中の『』べ少數だけだなア」

「へー」

「ま、俺様を上回るくらいこのヤツはそつそつ居ないけどな」

私の前に胡座をかいして座っている俺様天使がお箸を片手にフツと偉そうに笑ったのを視線に捉え、口を引きつらせつづりお箸に手を付けた。

対して会話も無い中で夕飯を食べ終わり、食器を片付けた後に居間で偉そうに踏ん反り返つてゐるだらう役に立たない俺様天使をそれなりに大声を出して縁側から呼んだ。

サンダルを足にひっかけて庭へ下り、しゃがみ込んで、のぞき込むと水面が家中から漏れる光を反射しながら、風に撫でられゆらりと揺れた。

そつと右手の掌をはわせてみると、ひんやりとした冷たさとつるんとした触り心地が神経を通して脳へと伝わった。

ふつと何故か頬が緩んでポンポンと意味もなくスイカを叩いてみる。

「人間、わざわざ来てやつたぞ」

スイカを叩く手を止め、半ばふくれつ面で振り返ると縁側に片膝をたてながら座り込んだ俺様天使が居た。

果てしなく偉そうなこの物言いはどうにかならないのだろうか。

だがこんなことを正面切ってこの俺様天使に言つても無意味なのは眼に見えて明らかである。出会つてから対して時間も経過していくなが俺様天使の性格をだいぶ把握してきたような気がする。

・・・あまり嬉しくない。

ふう、と息を吐いてから膝に力を入れて立ち上がった。

ざり、と砂を踏む音を捉えながら縁側へと進むと、片膝の上に顎を乗せこじらを見ていた俺様天使は何事かと頭を擡げた。もた

ふわふわとしたゆるい髪が宙を舞う。

「ちょっと待つてて」

一言、言付けてから台所へと向かい、まな板と包丁、サラランラップ、タオルを大きめの盆に乗せて縁側の方へ戻る最中に、ふいに古い木製の扉を視界に捉えて私は足を止めた。

扉の下は煤や埃で汚れており、うすら取つ手の部分が灰色に染

まっていた。

思わず鼻で過剰な抗原抗体反応が起こりそうになる。まあ、つまりはアレルギーと言われるものなのだが。そういうえば、あの中にはあれ残つてたような気がするなあ・・・。

頭を過ぎた物に興味を注がれたが、手に持つお盆の重さにハツとして切り替えをするように頭を振り縁側へと戻つて行くことした。

「お待たせ」

「確かに待たされたが、俺様は寛容だから特別に許してやる」

「はいはい、どうもありがとー、と棒読みで感謝の意を告げ、お盆を置くと俺様天使は訝しげに見下ろしたが私は気にせずによいしょ、とタライの中からスイカを持ち上げてタオルの上に準備しておいたまな板へとそつと乗せた。

俺様天使はパチクリと眼を瞬かせ、呆然とした顔をしていたが、私が包丁を手に取った瞬間に包丁を瞬時に私の手から奪い取り騒ぎ始めた。

ゆらりと俺様天使が纏っていた光の靄の色が銀から紅へと変化した。

「に、人間！何しようとしたんだ今！？」

「はあ？何つてスイカを切るに決まってるんでしょ。それ以外に何があるっていうの？」

「んな！やつぱり人間は俺様の前でそれを切ろうとしてたのか！？」
「切る以外にどうやってスイカを食べろって言つのアンタは！？まさかスイカ割りみたいに割れってか！？」

「違え！俺様の前でソレの命を奪うなつづってんだ！？」

包丁を後ろ手で隠しながらそう喚いた俺様天使に私は、勢威を削が

れてしまふきよとんとした顔を思わずした。脳内で、先ほどの幻図を反芻してみる。

ソレの命を奪つたつひんだーー

・・・・・いや、え？ ちょっと待て。ソレの命を奪つたつひつたよね？ え、え？ あれ、え？ これスイカだよ？ いや確かに命はあるつちやあるんだけど・・・。もしかしてスイカって知らない・・・？ いやでもそんなまさか。

内心ドキドキする胸を押さえながら、手を下ろして声に出してみよう決めてみた。

「あのや、スイカって果物だよ・・・？」

いや、スイカって果物じゃなくて野菜だつたつけ？ いつも、古代のエジプトの人もスイカ食べてたらしいんだつてね。ま、穀を食べるんじゃなくて種を食べてたみたいだけど・・・。

「あア？」

あからさまに眉をぴくんとはねさせた俺様天使に再度私は同じ言葉をかけ直してみるとこした。

「だからスイカって果物なの」

「…………卵じやねえのか？」

「違うよ。もしそうだったら一体何の卵なわけ

「…………」

俺様天使はまな板の上のスイカに包丁を持つていない方の手をのばし、そつと触れてから、翠色の瞳を静かに閉じた。

触れている方に視線を落とすと、ふいに俺様天使の手から紅色の光の靄が晴れていくよつに、銀色の靄に侵蝕されていった。

翠色の瞳が私の濡鴉色の瞳に映ると、すぐに反らされ俺様天使はپイつとそっぽを向きながら包丁を差し出してきた。私は白い眼でその包丁を見下ろし溜息をつく。

「いや、確かに包丁は返して欲しいけどさ、刃の方を向けて渡さないでくれる？」

柄の方を俺様天使が持っていた為に嫌が応でも刃先がこちらに向かれている。刺したいのかこのヤロー。

私が、心底呆れた感じでそう呟くと俺様天使はギロリと睨んできた。だがしかし、何故私が睨まれなくてはならないのだろうか。

仕方無く刃先を指を傷つけないように持ち、包丁を受け取った。

何等分にか切つたスイカを一人縁側に腰掛けながら赤く熟れ、溢れ出る甘い果汁を零さないようにして一人して静かにぱくつく。

黒い種をゴミ箱に入れ、そつと横を見てみると俺様天使は黒い種まで飲み込んでいるようで、思わずぎょっとして俺様天使の膝を数回叩いた。

「ちょ！種は食べなくて良いんだよ？」

「食えんだろ？」

「た、食べられることは確かにそうだけどさー。」

「んなら構うんじゃねえよ。どうせ食つたって俺様は消化しねえんだからな」

「消化しないってつまり、食べても食べなくても良いってこと？」

「あア。栄養なんてもんは俺様には必要ねえからな」

「へえ」

そこで私は一度会話を止めて、スイカに齧り付いた。

食べなくても良い、とは一体どんな気持ちなんだろう。食欲というのは睡眠と同じで動物が生まれ持つていてる本能。動物は本能に従い、食べる為に生きるのではなく、生きる為に食べる。

他の命を奪つて、ただ生きる為に

「やういえば、さつきスイカを卵だと思つてた時に、殺すなみたい
なこと言つてたね」

小首を無意識に傾けると、俺様天使が小さく舌打ちを響かせた。忌
々しそうに眼を細め、睨み付けた方へ私も視線を向けてみると、澄
んだ森を照りすように落ちてきそうな星空が視界一杯に広がつた。

ふと甦る柔らかな声。

そういうえば小さい頃、死んだら星になるつてよく言われたよね

（穏やかに紡がれたその先の言葉を思い出したくは、ない）

・・・じゃあもし僕がさ

思い出したくは、ないんだよ。

握る手に力がこめられる。光り輝く星空を淡々と眺めていたら、ふ

いに俺様天使がこちらを見ていることに気がつき視線をずらすと、俺様天使は何とも言い難い表情を浮かべていた。

「・・・人間は、星空が嫌いなのか？」

一瞬、喉に何かが詰まつたような感覚に襲われた。

だけど私は俺様天使の問いを笑つて流そと、口角をつり上げたが無意識に顔を隠すようにして俯き、瞳から全ての景色を隔絶した。昔の情景が瞼の裏に否応なしに映し出されるのに気がついていながら。

さらりと、髪が肩を滑つていく音がした。

夜空はあの頃と全く変わらないようにみえるのにやっぱり変わってしまったもの。

遠くへ遠くへ、消えてしまったものは一体どこへいったしまったんだろう。

俺様天使は、髪で見えなくなつた表情を伺うように黙つて見ていたが、ふと、隣に腰掛ける者の掌の白さに気がついた。強く握りしめ

られた掌に更に力が込められ、ふいに、ふるり、と黒い睫毛が揺れた。

「…………嫌い」

「星なんて、大嫌いよ」

だつて、だつて

死んだら、星になつて君を照らして、見守つてあげるよ

星が光輝いているのは、自分の命を削つてるからなんでしょう？

私は、一度も、死を迎えていたみたいで

それは朝、冷蔵庫を開けた時から運命付けられていたのだ。

「材料がない・・・」

「 おい人間！ あのでつけえ動いてる固まり何だよ！ ？ しかも赤青黄のあのランプは一体どういう意味があんだけ！ ？ つーか、アレは何だアレ！」

なぜか、言動が田舎者と同じである俺様天使と共に。

ああー、と両目を思わず一瞬手で覆い隠して現実逃避を図つたが俺様天使の急かすような声に現実を見つめることを嫌々ながら決定した。

「あれは車。人を乗せて運ぶの。ちなみにぶつかつたら基本死ぬから。それでのランプは信号。車や人を規制するもの。青の時だけ渡つて良しのサインだから。それで、アレは」

そんな問答を繰り返し続けた私はスーパー近くに辿りつく頃にはようやくなっていた。いつまで喋りさせるつもりだこの俺様は！！

少し前をきょろきょろしながら歩いている俺様天使の背中を半ば半眼で睨み付けたが当の本人は気がつく様子もない。

眼からビームはなぜ出ない。

そんなあほらしいことまで考えてしまつて、自分の疲労は相当なものだと実感し、スーパーに着く前にどこかで休もうと周りを見回してみると、ちょいちょい可愛らしいカフェを見つけて。

「ねえ」

「あれなんであんなに早く走るんだよ。一体何の乗り物だ？」

「バイク。車と自転車を混ぜた感じのもの。それよりもさ」

「あのガキが持ってる透明の入れ物はなんだ？」

「ペットボトル。硝子を柔らかくしたような入れ物。といふか聞いてる？」

「だあああーーうせえなあのバイクつづりやつはーー何で何体も一緒に音たてながら走つていってんだーー！」

「・・・・・ちよつと」

「お、おい人間！女が箱入つてるぞーー？」

「・・・・・テレビ。箱に入つてるわけじゃない。といふか聞けつての、この性格破滅者」

「箱に入つてないつうことは・・・映しの鏡みたいなもんか。じやあアレはなんだ？」

「・・・・・・・・・」

「だからアレだつつてんだろ人間」

ひくりと口角を引き攣らせ黙りを決めた私に俺様天使はイライラしながらも振り返らずに聞いてくる。

肩にかけたバツクでその頭殴つてやるつか？

バツクを手に持ち直し、スイングするよつに後ろにふり下げるところによつやく馬鹿空氣読めない変態巫山戯るな俺様天使が振り返つた。

「さつさと答える聞いてんのか人間」

思わず振りかぶつたバツクで俺様を軽く吹つ飛ばしたのは悪くないだろう。何が聞いてんのか人間だ。聞いてないのはアンタの方だろうが。

バツクをぶつけられた俺様天使はぶつかつた頭を手で押さえながらギリギリと歯ぎしりする勢いで私を睨み付けてきた。

「何すんだ人間」ときが！－

「私の話を聞かなかつたアンタが悪いんでしょうが！－－といつか誰がここまで連れてきてあげたと思つてるわけ！－？」

「あア？誰が！」今まで付いてきてやつてやがると思つてんだ

自分こそ正しい、自分が一番偉いとでもいうよつにふんぞり返つてそう声に出したヤツの頭禿げろ！禿げまるだしになれこん畜生！－－

むしとりそうになる手を逆の手で押さえ激情をのみこんだ。取りあえず今は休みたいので私は俺様天使にこっち来て、と行ってカフェに無理矢理押し込んだ。

扉に鈴か何かが付いていたようで、扉を潜りぬけるとチリンと可愛らしい音が響いた。

ウェイトレスの人が駆け寄つてくる。ウェイトレスのお決まり文句の「何名様ですか」に答える為に脳内で「一人です」という言葉を瞬時に作つたが中々お決まり文句が降つてこない。

不思議に思つた私が置いてあつたメニューから視線を外しウェイトレスの方を見てみると視線が全く動いていなかつた。

その視線を追つてみると、金髪のふわふわな髪にたどり着く。

俺様天使の後ろに立つていた私は、ああ、と気がついた。ここから見れば、髪に辿り着くが、前から見れば顔につく。

確かに変態だろうと馬鹿だろうと破廉恥だろうと人の話聞かない性格破滅者だろうと無知であるうと俺様であるうと

こいつ、顔だけは良い。

白い肌にスッと通つた鼻。宝石を填めこんだような翠色瞳を縁取るような長い睫毛。艶やかな唇は微笑みを絶えず浮かべているようにみえ、甘い綿菓子のようなふわふわな金の髪が光に反射するように

煌めいているのだ。

しかも今日は清秦おじいちゃんのお孫さんの服を借りている。
さうに言つなれば、お孫さんのセンスは抜群である。

されど、とウエイトレスに哀れみの表情を浮かべた。顔が良いだけではダメなんだよウエイトレス。」いつ、顔は良くて性格最悪だから。

「あの、すみません?」

「・・・あーも、申し訳ありません。何名様ですか?」

「名です。そう答えるとウエイトレスは少しわたわたした様子でテーブル席へと連れていつてくれた。

オーダーは後でお願いしますと答えると、少し残念そうな顔をした後に俺様天使の方を名残惜しそうに見ながら去つていつた。

どこかほっとして椅子にもたれかかりながらメニューを開くと俺様天使の視線を感じて顔を上げてみるとニヤニヤ顔のヤツが居た。この顔はどうせじょもないことを言つて違ひない。

「あの女、俺様に見惚れてやがったな」

「・・・」

ほらね。とりあえずうん、と短く返し、コップの中の水に口をつけた。

氷によつて冷やされた水が喉を通り、身体を潤うイメージがふと脳裏に浮かんだ。私の身体は今まで砂漠だったのだろう。浸み渡る。

「あ、このトマトスパゲッティーとプリンカフュームをお願いします」

「かしこまりました。プリンカフュームの方はいつお持ち致しましょうか?」

「食後でお願いします。」

注文を終え出されたスパゲッティーを口に運んで咀嚼すると、眉間に皺を寄せた俺様天使がコップに口をつけていた。そして、手元でコップをぶらぶらと手持ち無沙汰に揺らしてからはたから見れば綺麗で鮮やかな、私から見れば腹立つ笑顔を浮かべた。

そこで頬を染めてる見知らぬ女性、騙されるな。

「呑気になに一人で食つてんだよ」

「だつて食べても食べなくても同じなんでしょう?それなのに懃々頼

むのはお金がもつたいたいないじゃん

ぴしゃりとそう言つと、俺様天使はそういうえば、と自分が言った言葉を思い出し、まあ、確かにと咳いた為に、私はこの話しさこれで終わりかと思っていたが、それはどうやら甘い考えだつたようだ。

「だけど、人間は天使に貢ぎ物を捧げるべきだろ?」

「べきじゃないです」

聞く耳を持たないよううにそうさらりと流したが俺様天使はそれでも口を尖らせて、寄越せ寄越せと馬鹿の一つ覚えのよううに連呼していく。

（そろそろ周りの客の視線が辛くなってきた・・・）

フォークをかちやりと置き、口元をナップキンで拭いてから「すみません」とウェイトレスを呼んでもう一つの注文の品を先に持つてもらひよつに頼むと、ウェイトレスは是の意を示し下がつていつた。

未だに俺様天使の目線は私のスペゲツティーへと注がれている。他人が食べているものの方が美味しい見えるという心理は確かに私も体験したことがあるから理解できるけど。

ふう、と溜息を一つ吐いてから、俺様天使注目筆頭株ならぬ筆頭皿をヤツの前まで押し出すと、ガバッと顔をあげて私を見た。

翠色の瞳が何かを期待するかのようにきらりと煌めいて見える。

待て、をされている犬なのかこいつは・・・。

肘をつきながら俺様天使を観察していると、フォークで巻き取ったスペゲツティーを怖ず怖ずと口の中に運んでいく。

あーああ、何て満足そうな顔をしているんだろうか。

ふうと思わず口を緩ませると、プリンカフェが運ばれてきた。

肌色のぷるるんとしたボディーに茶色のカラメルソースがふんだんにかけられていて、とろりとボディーを滑つて行った。ウエハースが一つチョコレートクリームにわさわさしている。

チョコレートとバニラのクリームのコントラストを彩るよつに透明な容器からコンフレークが見え隠れしていた。

ウエハースを一つつまみ上げ、クリームを付けて食べると、サクッとした食感と甘く冷たい感覚が口の中に広がった。

甘い幸せに、ふふふと頬に手を当てると俺様天使が残っていたスペ

ゲッティーを食べ終え、何か怪しいものを見るかのように私を半眼で眺めていた。

「食べ終わったの？」

「あア・・・」

「ふーん、じゃあこれ食べなよ」

手に持っていた残りのウエハースを気にかけながらもカフェを俺様天使の方へと先ほどと同じように渡すと、きょとんと間抜けな顔をした。

「もともとこれアソタにあげるつもりだつたし」

食べて良いや。と続けざまに告げる。

一瞬眉を潜ませた俺様天使は、素直にこくつと小さく頷いた。

「ほら、そこにスプーンがある・・・って」

軽くひつぱりれ、顔を思わずあげると、ふいに視界いっぱいに金色のふわふわとした髪が広がった。ウエハースを持っていた冷たい指先を熱いものが静かに這つてくる。

反射的に腕を引っ張つて身を後ろへ下げようとしても右手が強く掴まれていて動かすことが出来い。

真っ白になつた頭が、掴まれた右手の熱さを伝えてくる。
息を浅く吸い込んだ所で、熱いものが名残惜しいかのようにぺろりと指先を舐めていった。

自分の指先を呆然と眺めてから、離れていく俺様天使に視線を向けると先ほどまで自分の指先を這つていつたであろう赤い舌が、ペロりと扇情的に唇を舐めとり蠢いた。

俺様天使は呆然としつつも真っ赤になつた私に気がつき白く長い指で口元をすつと拭いとり、満足そうに眼を細め言葉を紡いだ。

「甘いな」

「…………」

その一瞬に、ぐわアアあと怒りやら恥ずかしさやら色んな気持ちからさらさらに頬が熱くなつてくるのに気がついた私は凄い勢いで顔を下へと逸らした。

（一体何なんだこの変態天使は…………）

スーパーに辿り着いた頃には、もうへとへとなつた私。

子どもの「何で?どうして?」攻撃に耐える大人はこんな苦労をしているのか。

まあ、変態セクハラ破廉恥俺様天使は、純粹無垢な子どもではないが無知な所はまったくもつて同じだ。

じろりと俺様天使を見ると、視線に気がついた俺様天使は私の視線に気がつき、形の良い唇が面白そうに半円を描いた。弧を描いた唇を捉えると、先ほどその唇に指を触れられたことを思い出して、かあああ、と頬が熱くなってしまい隠すように俯きスーパーまでの道を歩いた。

自動ドアをくぐり抜けると、ひんやりとした冷たい空気が火照った身体から熱を奪うようにまとわりつく。夏に冷房は神である。

スーパーの赤色の買い物カゴを手に取り、俺様天使を見てみると、買い物カゴの隣に置いてあるカートを興味津々に眺め回しており私は咄嗟に買い物カゴを握る手に力を込めて備えた。

ああ、くる、くるぞ!例のあれが!!

「人間！これ何だ！？」

「・・・ベビー・カーみたいなもの。子ども乗せて物を運ぶ感じなやつ」

ほらきた、例の「これ何だ」攻撃。

面倒くさそうに答えたが、律儀に教えてあげた私は偉いと思つ。その返答にきりきらと瞳を輝かせていた俺様天使はあつさりと輝きを失わせた上に、つまらなさそうに言いやがつた。

「ああ、ガキを運ぶアレか。」

この野郎、百科事典でも頭にぶつけてやるつか。しかもなぜ自動ドアに吃驚しなかつたのだ。

ぐらりと、頭を擡げた感情を理性で制し、足を進めると野菜売り場が一番最初のコーナーとなつていた。

夏の野菜である赤く熟れたトマトを筆頭にキャベツや胡瓜などを手に取つて眺めたあと、手早く買い物カゴに入れる。

私の横で、従業員が申し訳ないようになに段ボールに詰められた野菜を次々に山に盛つていつた。

・・・そういうえば、「これ何だ」攻撃がいつの間にか止んでいた。
絶対ぐると思つていたんだけど。

そつ思つて顔をあげて左右を見てみるが俺様天使の姿が見えない。
幾ばくの驚きのあと、はつと気がついた。

この状況は、すなわち迷子の条件にあてはまる。

・・・・・ちよつと待て。え、なに、ちよ、はあ・どこに行つた
わけ！あいつ本当に子どもな訳！？迷子！？迷子だよねこれつて！
！眼を離したスキに迷子つて何！？！！

ちなみに、このスーパーは三階建ての一階の奥にある。

私は、買い物カゴの中の艶々とした野菜達を呆然と見下ろしながら
思考をフル回転させていたが、ふつと口角をつり上げ手近にあつた
モヤシを買い物カゴの中に放りこんだ。

ちなみに、私が辿り着いた答えは俺様天使がいない方が静かに、そ
して平和な買い物ができる、だつた。買い物を終えた後に迷子セン
ターにでも行つて呼び出せば良い。

迷子なんだねお兄ちゃんつて小さい子どもに指をさされて笑われる

が良いさ。恥を知りなさい。

レジでお金を払ってから、一つの買い物袋をぶら下げ私は一階にある迷子センターと書かれたコーナーの手前で葛藤していた。

さつきは確かに、呼び出されて恥ずかしがれと思つたのだが、これ何気に呼び出す方も恥ずかしいのだ。

従業員の不思議がる視線が痛い。

諦めたように私はいそいそと背を向けて、スーパーの入り口へと移動することにした。入り口のベンチで待っていた方が賢明なような

気がしたからだ。

二階から一階に下りるため、エスカレーターで下っていると、エスカレーター横のベンチに、ふわふわとした金髪を見つけた。

ヤツだ！

また迷子になられたら困ると私は、エスカレーターを駆け下りてふわふわの金髪を罵りたくなつたが、俺様天使が買い物客を、こちらが驚くくらい睨み付けていたのに気がつき口をつぐんだ。

そして私の存在に気がつき、俺様天使は瞠目した。

その瞳には、先ほどの鋭い光が嘘のように霧散し心の底から安堵したような柔らかい光が灯っている。その雰囲気に言いしれぬ何かを私は感じてどうすれば良いのか分からなくなつて木偶の坊のように呆然と/or>してしまつた。

「・・・人間、帰るぞ」

いつもは自信に満ちあふれたその声が、掠れるような音を出す。伏せられた長い睫毛が、堪えるように震えているのに気がついた。

・・・ああ、そつか

私は思わず買い物袋を左手に纏めて持ち、右手で俺様天使の左手を握って、身を竦ませつつ恐る恐ると顔をあげた俺様天使に安心させるように微笑んでみせた。

「いりしてれば、もう大丈夫」

繋がれた掌の暖かさとともに脳裏に、優しく笑う彼が一瞬だけ過ぎつた。

「帰ろりつ。帰つて、清秦おじいちゃんに貰つたスイカ、一緒に食べよ」

（・・・ふつ、仕方無えから人間に俺様の手を握らせてやるー）

（あー、はいはい。殴つて良い？）

みんなん、と規則的に鳴いていたかと思つと少しの空白が訪れ、詰まつたかのように夏の風物詩である蝉が再び声を上げる。

そして私はこれまた夏の風物詩である棒アイスを両手に持つてていた。私は庭を視界に入れながら、縁側で田向ぼっこでもしているだらう俺様天使のもとへと足を進めていく。

早く行かなければアイスが溶けてしまう。そんなことを思いながら足早に歩を進めると、縁側に直ぐ到着する所で、ぎしりと小さく下の板が軋んだ。

その音に気がついたらしい俺様天使は寝転がっていた身体をゆっくりと起こした。

俺様天使のお腹の上で同じよつと日向ぼっこをしていたスズメが振動に吃驚したように左右に首を振つて庭の木へと飛び去つていく。俺様天使は木の枝に留まつているをスズメをちらりと見た後に、綿菓子のように、ふわふわとした金髪を揺らすと悪戯を思いついたようすに瞳をにんまりと細めた。

「おい人間、お前太つたんじゃねえのか?」

「マジくたばれ」

廊下が軋むのは古いせいであつて体型のせいじゃない！

片手に持つていた棒アイスを反射的に俺様天使の腹立つ顔面目掛け剛速球で投射ると、きょとんとした表情の俺様天使を見て私は、予想通りに顔面に当たるかと思い内心でガツツポーズをした。

だが、勝利の雄叫びならぬ感動の笑いが零れる筈だったのが私の口からは、別の言葉が出て来た。

「・・・は？」

「いつも抜けてる顔が更に間抜けな顔になってるな」

「うつさいわ！それよりもちよ、ちょっと待つて！え？ええ、ええええ！？何が起こってる訳これ！？」

私が声を荒げたのは仕方がない理由がある。人差し指で恐る恐るその現象を指さした。

満足そうに笑う俺様天使の顔の前で、私が投げ付けた棒アイスは重

力の存在を忘れたようにそのまま空中で停止している。

いや、若干上下に不規則にふよふよと浮いているが。

これで声を荒げずに何をすれと言つのだ！－！

いや、だが落ち着け私。

相手は俺様だ。破廉恥で変態で、おバカさんで奇天烈な金髪綿菓子だ。

そして百歩譲つて取り敢えず、多分一応は、それなりに天使なのだ。

見た目とか見た目とか見た目とか。・・・あと、精霊とか。

そこまで考えると、なんだか妙に冷静さを取り戻した。変に吃驚した自分があほらしい。

相手は俺様天使だ。もとよりコイツが異常なのは知つていただろう。

脳の巡回を終えると、宙に浮いていた棒アイスがぼとりと俺様天使の手中に収まった。

「アイスか？」

「あー、うん」

はむ、とアイスに口を付けた俺様天使を見ていると、冷静さが今度は好奇心に取つて代わられた。何だか気分が高揚して、うずうずしている。

すとん、と俺様天使の横に座つて同じようにアイスを頬張ると俺様天使はこちらに視線を落とした後に庭の方に瞳を向けた。

「気になるのか？」

「むぐッ。」

アイスが気管に入る所だった・・・！

壊れたブリキのおもちゃみたいに小さく飛び上がり、そろりと私より背の高い俺様天使を見上げると、俺様天使も私を見ていた。

それにやにや笑いがムカツクのですが！

大人気無いとは自分でも思うのだが、ムツとした表情で口を尖らせる。

自分の心を読まれた感じがして少し腹が立つたのだ。

「そんなにも分かりやすかつた？」

「まーな

ひたすら渡り行く青い空に入道雲がゆつたりと泳いでいる。そんなゆつたりとした動きに、太陽も雲の隙間を出たり入ったりしている。そして、隙間から顔を出した太陽はこれ見よがしに、じりじりと世界を焼き始めた。

壙に巻き付いている赤い色と青い色のアサガオが光に照らされて地面に小さなゆらゆらとした陰を作った。

縁側は陽が当たる場所なのだが、私は俺様天使の陰の中に居たから肌を焼くことはなかった。

ちなみにこの俺様天使は、いくら陽に当たるつとも肌の色に変化はない。

勿論、肌が焦げ茶になることはないし、赤くなることもない。非常に羨ましい肌の持ち主なのだ。

太陽に思わず瞳を細めながら、竹で作られた簾をそろそろ準備すべきか。と思案し、夏独自の熱さに手で自分を仰ぎ風を作ろうとしたが全くもって意味がなかつた。逆に熱くなつた気がする。

まあ、ここは山の中の田舎にあるから、都会よりも大分涼しいのだが。でも今日は異常に暑いなあ・・・。

アイスで体温を下げようともう一度かぶりつぶと冷たい風がふいに通り抜けた。

クーラーのような冷気を含んだ風。

思わず目をぱちくりさせると、横からくつくつと喉で笑う声が聞こえポカンとした表情のまま見上げた。

「ふツ、変な顔」

ぐにーと、私は俺様天使に頬を引っ張られた。

「やべえ超おもしれえ。良くのびる頬だなーー！」

「まひ、ふたはれーー！」

「あア？なに言つてるか分かんねえなあ

マジ、くたばれって言つてるんだよ！畜生さつさと手を離せ！アイスが溶ける！！！しかも私が何を言つてるのか分かつてんでしょうその顔！

アイスを持っていない手で俺様天使の右手を抓るとしふしふとアイツは手を離した。

ちなみに俺様天使はもうアイスを食べ終わつたらしい。アイスを包んでいた紙に棒が包まれてている。

「涼しいだろ？」

「・・・・・まあ、うん

そう、確かに先ほどからヒンヤリとした風に身体が包まれているようで、暑さが引いていくのだ。頬を引っ張られたのが腹立つので、長い沈黙の後に頷いた。

「これも、精霊の？」

「あア。風を司つてゐる精霊の力だ。だから俺様に感謝しろ

「いやいやいや、感謝すべきは精霊にでじょうー！」

胸を張つて偉そうに言つ俺様天使にそつやつて突つ込むと俺様天使は首を傾けた後に、嘲笑を浮かべた。

「精霊は俺様に力を貸したがつてんだよ。んで、俺様に力を貸せて満足している。人間も涼しくなつて嬉しいだろ？つまり最終的に

は感謝されるべきは俺様つついとだ

そんな屁理屈がまかり通ると思っているのだろうかこの俺様天使は。ぐりぐりと米神を解して、食べ終わったアイスを紙に包んだ。

棒アイスを、ゴミ箱に放り投げて、つきあつてらんないわと肩をすくめ縁側の真ん前にある部屋で小さな机の上に青色の薄っぺらいノートを開いた。

言わずとも知れるが、いわゆる「夏休みの宿題」に該当するものである。

青色が指示示す教科は例に漏れず数学だ。

シャーペンを右手に持ち、人差し指で押すと親指の上を綺麗に円を描きぐるぐると回った。

ノートに印刷されている円の中に収まっている三角形のそれぞれの辺の長さを求める図を暫し眺めた後に、シャーペンを走らせた。

sin cos tan

こんなものが、本当に日常生活で役に立つのだろうか。

そんな疑問を腹の奥に押し込めてただ、目の前にある数学の課題たちに集中した。

(・・・・・・・・・。)

ああもう煩いよ俺様天使！アイスなら勝手に食べて良いから自分で
とりに行きなさい！！

イライラが噴火し、反射的に消しゴムを振りかぶつて投げつけた。

(へぶつ)

(あれ、・・・あたつた)

私は、きちんとアイロンを施した清秦おじいちゃんに借りた服をオレンジ色の袋に綺麗に仕舞い込んで壁にかけられた古い時計に視線を一度向けた。

「清秦おじいちゃんに借りた服を返しに行つてくるね」

「あア？ 清秦のジジイの所に行くのか？」

「うん。一昨日服を借りたでしょ？ アイロンもかけたし、今日の勉強も終わつたし。」

青色のノートがパタンと閉じられて、ひつそりと机の上に置かれていた。

裏口に鍵をかけたし、戸口の確認もした。

靴箱の上の小さな藁籠の中からつさぎのキーホルダーがついていた鍵をひっぱり出した。

サンダルに足をとおそうとした所で、履き慣れたサンダルの横に、一回りも一回りも大きい真新しいサンダルが並べられているのに目を落とし、何だか面白いような、くすぐつたいような温かいような、胸焼けしたようなよく分からぬ思いに駆られてしまつて俺様天使にそんな感情を悟られないように、先に玄関の扉をくぐり抜けて。

広がる眩しい世界に、反射的に瞳を細めて手で陰を作つた。

* * * * *

数回通つた同じ森の小道を今度は一人並びながら歩を進める。

蝉や、鳥、色々な生き物の声が耳にすんなりと入つてきて、森に立ちこめるこの香りや色や音が、昔、それも私が凄く小さいときと全く変わつてないことにふつと気がついて一人啞然とした。

いつからだろ、小さい頃に夏が来ては、はしゃいだ森だったのに。
麦藁帽子をかぶつて、水筒をぶらせげて。

大好きだとみんなに公言して憚らなかつたのに。なんでだろ、この森を忘れてしまつたのは。どうして、大きくなつてしまつと、小さかつたころの大好きを忘れてしまつんだろ。

生き物だけではなく、小さな水のせせらぎも森の音を奏でて。
背の高い木々を植物の蔓が首飾りのように巻き付き飾り付けている。

一つの木が、伸びた蔓や小鳥の小さな宿り木となつて、足下の苔や小さな虫たちの傘となつて。そんな一つの木々が集まつて森になつてゐる。そして生まれた森はまた、一つの木を育ててゐるのだろう。

光に照らされて輝く黄緑色の木の葉と風が遊ぶのに呼応するように影が不規則にゆらゆらと形を変えていった。

大地を踏みしめたサンダルが、地面のでじぼじぼひづらひづらのようになりする。

緑で覆われた道に入ると、草独自のふわりとした感覚が足の裏に伝わってきた。

木の葉の隙間から零れる陽から逃れるように俺様天使の反対側に回り込むと、訝しげな顔をしていたが何も言われなかつた。

緑のトンネルを、ぐぐり抜けそつと上を仰ぎ見ると驚くほどに青い空が視界に広がつて私は胸一杯に息を吸い込み、どこまでも広がつている世界にそつと俺様天使を隠れ見ると、眩しそつに瞳を細めて白い手で太陽を翳していた。

その視線の先を追つてみると、どこか違つているように思い、いつもたつてもいられなくなつて吸い込んだ空気で、大きな声を空へと向けた。

「空は繋がつてゐるー！」
「・・・あア？なんだ急に」

私の大声が空にすつと溶けていく。今のも森の一つになつたのだろ

うか。

俺様天使は、訝しそうに私を見下ろしてくる。眼が語っている。頭でも沸いたのかこの人間は、と。

それはただの被害妄想だ、と言つてくるヤツもいるだらうが、その被害妄想の確率は1%もない。いや、1/111クロンもない…1/111ジン1/111ももつとない。

「ちよつと叫びたくなつただけ」

そうやつてちよつと笑つて俺様天使を追い抜いて、もう一度、空を見上げた。

けれど追い抜かしたと思つたら、もう追いつかれている。本当に長い足ですこと。

神は「物を『えなない』とか『けだ』、コマイツは「物どこらか」」、「四と『えられている』と思つ。ああ、だけど、なにゆえ性格の良さ…、つまりは謙虚さとかを『えてなかつたんだらう。

つうか、顔良し、スタイル良し、性格は…、まあ言及しないこととして。ああ！ほんつとうに憎たらしい。足は長いし綺麗な形してゐし！アンタはシカか。といつか私とのコンパスが違い過ぎるだらう。

私の三歩が「マイツ」というの「歩じやないの？」よくもまあ私のペースに合わせられるね。

やれやれと肩を竦めた所で、はたと固まり足を止めた私を俺様天使も一歩進んだ先で足を止め、こちらの様子を伺っている。

だが今の私にヤツを構う余裕もとい暇はない。

いやいやいや、ちょっと待て。

まくも まあ 私の ペースに 合わせられるね ？

もう一度脳内でゆっくりと巡回させ、あんぐりとした顔で俺様天使を見ると俺様天使は、ぴくんと眉を跳ねらせて「そつときから一体何だ」と、腕組みをしていた。

まさか、

いや・・・まさか、・・・まさか、今まで

・・・今まで一緒に歩いてたとき、ずっと

私の瞳に、俺様天使の碧い瞳が映った途端、ぽふんと、頬に熱が走つたかと思ったら、

脳内回路がショートして、私は思わず「ぎゃああああー」と叫びながら

ら覗けだした。

(気を使って、くれてたの?)

「急に走り出すとか 一体なんなんだ？」

ぼふつと真っ赤になつてから「わやあああ」と女にあるまじき叫び声をあげながらもの凄い勢いで離れて行く人間の背中を呆然と眺めながらポツリと零す。

「つか、あんな感じの**ベスティア**いたよな」

逃げるよに走り去つていつた彼女の後を、彼は、ゆつたりと追つた。

見慣れた景色の中、色とりどりの朝顔があぜ道にも広がつてゐる。

「清秦おじいちゃん！――」

イノシシ扱いを密かに俺様天使にされてるのを知らなかつた私は、どたばたと庭へ飛び込むと、茶色の麦わら帽子をかぶつてた清秦お

じこちゃんが、気がついたよつて小さくへ顔をやらし顔をあげた。

「おお、じんにわは」

籠を持ち直して、きょとんとした後に、にこりと私に微笑んでくれたが脳内では未だに先ほどの新事実がぐるぐると回って尾を引いており何時もは安心できる笑顔も今回は、ほつと一息吐くことができなかつた。

とりあえず、この頬の火照りは走つたせいだ。うん、そうに違ひない。

肩で大きく息を吸いながらふんぶんと頭を振つて、清秦おじこちゃんに包みを見せ、首を傾けられる前に「服ありがとうございました。」とお礼を言つて縁側にそつと置いた。

慌ててこるような私に、清秦おじこちゃんは別の意味で首を傾けた。

「急いでるのかの？」

「えつー?あ、いえ別に急いでるつていうわけじゃないんですけど・・。」

なんていうか、ともじもじと歯切れの悪い私。だつてさ、俺様天使に会いづらいうかーどんな顔していれば

良いか分からぬいつていうか！！

ああもう、なんで私がこんなにも振り回されなきやならぬわけ！

「宿題とかかの？」

「まあかー順調ですかー」

未だに肩で息をしながら、片手をぱたぱたと横に振つて冷や水のせいか、少し湿つている地面から顔をあげた。

そう、今年の宿題は順調に終わつてゐるのだ。

なぜだか分からぬ。逆に不思議に思つべからこだ。

俺様天使が急に古屋に転がり込んできたことにくわえ、その俺様天使が、清廉で物静かとは言い難い性格だったからだ。

つまり、四六時中つるさ。

ことあるじとに「アレは何だコレは何だ」攻撃が始まるとだから。

私が、勉強できる静かな時間がとれるわけが、

・・・ない？

・・・・・ほんとうに?

突然、後ろから頭を一回コツンと叩かれた。

「あだつ」

つたく、俺様を置いてくたあどういう了見だ

「あア?
」

俺様天使の登場に、先ほどから中々ひかない熱がさらに上がつていいのを実感した私は
きやんきやんと噛み付くように喚きながら下から俺様天使を睨み付
けると一度眉をひそめ、私の頬をひつぱつた。

「ああ、やつぱりな。なんでこんなに伸びんだろ？うなア？」

頬を引っ張られながらも何らかの逆襲をしようとした背伸びしながら俺様天使の頭を

叩こうと背伸びしていた所で、清秦おじいちゃんがタオルで汗を拭いながらそう言つと、俺様天使はこちらが拍子抜けするくらい素直に手を離した。

いつもそんくらいい素直だったらしいものを。

「もし暇じゃつたら、一緒にどうつかの？」

「なにをだ？」

頬をさすりながら私も返答を待つていると、清秦おじいちゃんは籠の中から手袋と鍔を見せて、こじりと笑つた。

「清秦おじいちゃんー！オクラ採りやうからねー！」

私は鍔を片手に、緑色のオクラに手を伸ばした。

細長い枝の枝元に、5センチ程のオクラが3つ出来てこる。

オクラをよくよく観察してみると、根本が黄緑で先にいけばいくほど緑色が濃くなつていている。

つんつんと痛い纖毛を突いていると、遠くにいた清秦おじいちゃんが、親指に人差し指をつけ円を作った。

私も笑いながら同じ動作を返す。

ぱちん、ぱちんとオクラを切り取り、大きめの籠の中に放り投げた。

ここは清秦おじいちゃんの畑の一つである。

トウモロコシや、トマト、オクラなどの夏の野菜を作っているのだ。

ちなみに、俺様天使はトマトの収穫最中だった。

普段ごろごろしてるから、仕事に駆り出されて良い様だ。だなんて思いながらある意味ではありがたかった。落ち着ける時間がとれたからだ。

清秦おじいちゃんに「かぶつたらどうか?」と差し出され、一度はその申し出を断つた麦藁帽子で、ぱたぱたと自分を扇いだ。なぜ断つたのにあるのか? とこう疑問の返答は簡単だ。

「清秦のジジイの通りだ。ぶつ倒れたらどうすんだ人間」

そう言って、俺様天使が無理矢理かぶせてきたからである。

嫌がらせか! 嫌がらせなのか!! ちょっとあなたが気になつてゐる私にそんなにも追い打ちかけたいのか。

恨みやら照れやらを、ぐちゅぐちゅに混ぜ合わせた視線を俺様天使に突き刺すと、綿飴のような髪が太陽の光を反射して蜂蜜のようになつとつと、それでいて軽やかにきらきらと輝いた。

そして、俺様天使は採つたばかりのトマトを片手にこちらを振り返つて、本当に、本当に楽しそうに笑つた。

・・・初めて見た無邪気な笑顔

ちょっと、その顔でその笑顔は殺人級でしょっ！

思わずしゃがみ込み膝に顔を埋め、内心で喚いた。

「へ？」

「祭りだア？」

「やっぱりの、知らんかったか。」

ほわりと微笑んだ清秦おじこちゃんに一瞬こぢらも、ほわりと緩んだ微笑みを作りそうに思わずなつたが、視界にちらりと入った俺様天使の一ヤリとした笑顔を見つけてしまい顔をひきつらせることとなつた。

思わずぶるりと小さく背中が震える。今までの勘が告げている。ぜってえヤツはキラキラな瞳をしている。無理無理無理、あんな瞳を見たら。コイツと田を合わせたら負けだと。

知らない見ない誰も居ない聞いてない、つまつ見ざる言わざる聞かざる居なざるを心のなかで繰り返す。

祭りは雰囲気が好きだがそつまでして行きたいとは思わない。

屋台の食べ物もなんだかんだで高くつくし・・・といふか、俺様天使と一緒にきたくないというのが本当のところである。

あんなキラキラ目立つ奴といたら、平凡な自分がなんだか悲しくなる。周りの目が痛い。

そんなシーンを脳内で巡らせてみると無意識にひくつと口元が引き
攣つた。

「ないないないない。マジでそれは無い」

「なにがないんじゃ？」

「う、え。あ・・・独り言です。あは」

軍手を丸めている清秦おじいちゃんに私は日本人的笑いを零し有耶
無耶化を図った。

私のこれ以上聞かないでオーラを感じ取つたのか清秦おじいちゃん
は口を閉ざしたが、空気が読めない某アホ天使がいることを忘れて
いた。

脳内テリートしても良いだらうかと神に問いたい。

「よし、人間！祭りに行くぞ！」

「忙しいから清秦おじいちゃんと行つてきなさい」

予想通りに降つてきた台詞を命令口調でズバッと切り捨てる、俺
様天使はム、と口をへの字にした。

いい大人がなんて子どもっぽいことしてんんだ。

まったく、そんな顔してもちつとも可愛くないしじぶさいくな・・・

ああもうマジ顔良いと得だよな！

半眼で睨みつけると一瞬だけ狼狽える素振りを見せてから、俺様天使はハンと鼻で笑った後に偉そうに胸を張った。

「俺様が決めたんだ。従え」

「ねえ、バカなの？バカだよねアンタ？」

なにが俺様が決めたんだ、従えなのか。訳がわからない。斜横思考は止めてもうえないとどうか。

「清秦おじいちゃんと行けば良いじゃん。そりやあ清秦おじいちゃんが暇だつたらだけビ」

「あア？ 清秦のジジイは無理だろ。余計な力を使わ「何を言つておるんじや」

後ろから言葉がかけられて続く言葉を遮られた俺様天使も私と同じように振り返ると清秦おじいちゃんがお盆を両手で支えていた。

上には麦茶と三つのコップが用意されていた。

冷蔵庫から出されたばかりなのだろう、露点に達して水滴ができる。

きんきんに冷えたつて感じだ。

「ほれ、冷えてるぞ」

「ありがとう」

両手で受け取り口をつけると冷い麦茶が歯を一瞬しびらせ喉を引つてお腹に渡つて行くのを神経が捉える。コップから片手を離すと案の定、手の平が水滴で濡れていた。

「なんの話をしておったんじや？」

「祭りに行くつて話しだよ」

「いや、纏めすぎでしょそれは…えっと、ここつが清秦おじいちゃんと一緒に行きたいみたいで」

「俺様に付いて行きたいの間違いだろ？」

「はいはいはい。で、どうですか？」

「すまんの、一緒に行けんのじや」

「ううん…」ひさしごそ急になんか「めんね」

心のうちで激しく訳もわからぬ罪悪感に苛まれていると俺様天使が関係なさげにお茶を啜つてから端整な顔にニヤリと微笑みを浮かべのを見てしまい、私はがっくりと肩を落として訪れる未来を思い浮かべ顔を覆つた。

断れない私も私だよな…って自分に突つ込んだのは道理だと思つ。

冷蔵庫を開けると清秦おじこちゃんの煙でとれた少しびつな形をしていた大きなトマトと小さなトマトが、鮮やかな赤で存在感を主張している。

なんだか、チグハグだなあって笑つて麦茶を取り出し、戸を開めた。

暑い。今日は果てしなく暑い。

首筋を伝つ汗を乱暴に水色のタオルで拭い保冷剤を首の後ろに充てがいなおした。だが、保冷剤の氷が首の体温と外気によつて溶けかかっていたのか、呆氣なくそれはぬるくなつた。

タオルを首にかけ手元で液状になつた保冷剤を遊ばせながら溜息をついて横を見る。

「アンタは本当によくまあ寝れるわ」

縁側で丸くなつてグースカ寝てる金の綿飴。

もう分かっているだろ？が、自称ありがたあ あい天使だ。

若干ぶすくれながら、綿飴みたいな髪を恐る恐る手で撫でると、俺様天使の髪が想像以上に柔らかく指通りが最高だつた。

絡まることを知らないつていうことなんだなあと、数十秒の間

その柔らかさを堪能せりもりつた。

「・・・・・」

私は、ぴくりとふに跳ね上がった手を俺様天使からゆくくつと離し、上を見上げた。

空には清々しい青色のキャンバスを入道雲がゆくくつと形を変えながら流れ去り、澄み渡る青と森の緑と白い雲。三色のコントラストを太陽から零れ落ちる光が鮮やかに彩りを添えている。

瞳を閉じると、みんみんと蝉の鳴き声が聞こえ木の葉のざわめきとともに風が通り抜ける。

みーん、みーんと蝉の鳴き声が頭の中に響き私はハッと眼を開けた。

「・・・・寝ちゃつたんだ」

しょぼついた瞳できょろりと横を見てみるが傍で寝ていた俺様天使の姿は無く、手持ち無沙汰に団扇へと手を伸ばした。寝る前も思つてたけど暑い・・・。しかも寝起きだからさうに暑い。

ぱたぱたとうちわで扇ぐが生ぬるい風しか届いてこない。なんてことだ。

ううー、と唸りながら青臭い畳に倒れ込むと仄かにひんやりとしておりそのまま寝転がることにした。あ、わたくはくってる。

うちわを放りだして体から力を抜いた、のだが。

「だあああー暑いー！」

即座に温くなつた畳から振り払つよう上半身を起こしあげ私は、押し入れから鞄を取り出した。机の上においてから洗面所へ行きタオルをつめる。

そして廓すなわち台所にある冷蔵庫の中から冷えた麦茶を氷と共に水筒の中に注ぎ入れる。

「よしつと
「どうか行くのか？」

鞄のチャックを閉めた所で、姿が見えなかつた俺様天使が廊下の向

「川から声をかけながら近づいてきた。

「川行かない?」

「川?」

「うん。清秦おじいちゃん家の近くに川があるの」

「川なア。・・・良いぜ、付いてってやるよ」

はん、と偉そうに宣うが、ただここにいたって何もやることがないだけだろうが。と思いつが喉の奥に呑み込んだ。賢明な判断である。

清秦おじいちゃん家に行くとき通る森の小道を歩くが、通り抜けきる少し手前から歩くペースを緩めた。

* * * * *

「うひー」「うひー」
「おこ、やつちに道なんてねえぞ?」
「歩道沿いに行くと暑いし遠いからうちから行くの

じまく歩くと木々で挟まれていた視界が急に広がって青が飛び込

んできた。

川である。

たたつと川縁に走りよつて鞄を置き、済んだ川を覗き込むと太陽を吸い込んだ柔らかい水の中、魚がちゅうりと逃げていつたのが目で追えた。

川の底にある小さな小石がゆらりと流れに抱かれている。

「綺麗な川でしょ？」

「まあ、な」

「よし、じゃあ遊ぼう」

「・・・・・は？」

ぽかんとした顔の俺様天使に小さく笑つてから肩にかけたタオルで汗を拭つてサンダルをそのまま爪先から川に入れると一瞬の痺れが脳へ伝達された。

「冷たいーーーやはばになにこれ最高ーーー」

膝下一分に一ほどが川の冷たさによつてひんやりと過剰なまでに保たれていた熱を奪つ。

水の中ではじやはじやはじで水を蹴つたり掌を水面に這わせてみたりする。

両手を川に浸し掬いあげてみると煌々と陽の光を反射して色を変え
つつ指の隙間からぽろぽろと虹色の涙が零れ落ちて水面とまた融け
合つていった。

今度はたくさんの虹色の涙を空へと少しだけ返すと青い空のキャン
パスに色鮮やかな花が舞い散った。

重力に従つて落ちてくる七色の雲に包み込まれるようにして顔を綻
ばせている、そんな彼女を俺様天使は川縁で座りながら、瞳を柔ら
かく細めて、小さく微笑んだ。

そして彼は、静かに口を開いた。

「ガキだな人間」

「・・・・・・」

そう言つた俺様天使を内心「アアン！？」と思ひながら振り返つて
みると、予想と違つて、俺様天使は優しい表情を浮かべており思わ
ず羞恥に身動ぐ。

本当なんなわけですか、その微笑ましそうな顔。

火照った体を誤魔化すように。

・・・左手にできる限りの水を溜めて、ツ持ち上げる！

「うつわ！－てめ、人間なにしやがるんだ！－！」

「ふふん、冷たくてきもちい－でしょ－？」

かけられた水で湿った服をわたわたと摘みながら、俺様天使は目を吊り上げて、ぎゃんぎゃんと吠えかかってきた。

それに対して私は、川の方に視線を戻して俺様天使から見えないよう、してやつたりとほくそ笑んだ。

「んぎゃ！－？」

だが、ざりざりと石同士が擦れ合う音が川縁でしたとと思つた瞬間、背中が唐突に冷たさを感じ反射的に飛び上がつた。

何事かと頬へも伝つた冷たい零を左手で拭いながら振り返つて見ると、濡れた手を払つている俺様天使が珍しくニイツコリと笑つていた。

「ハツ、冷たくて気持ちいいだろ？！」

「（む、むかつく）トイツー……」

私は、浅い川の中で両足で立ち上がり前へ進むと同時に俺様天使の腕をひっぱり入ればしゃりと水が跳ねる音がすると同時に開いている右手で水をすくいあげ予感していたのか身体を縮め込んだヤツにぶつかけた。

暫しして、ほたりと、蜂蜜色の髪から零が滴り落ちた。

・・・・・小刻みに俺様天使の肩が震えている。

「・・・・・いい度胸だ人間」

地を這うような低い声と共にゆらりと顔をあげた俺様天使の翠色の瞳の濁りを捉えて私は顔を青く染め上げ瞬時に警戒いやむしろ逃亡体制に入った。

そして響いた音は、一人の叫び声。

（テメエマジふざけんな！！濡れただろうがーー！）

（アンタが追いかけてくるのが悪いんでしちゃうがーー！）

（んなもん知るかー転ぶなら一人で転べーー！）

（ハハンツ、道連れ万歳ーー！）

私が、ふと廊下の角を曲がると、俺様天使が眼に入ってきた。ヤツはいつもの縁側で大の字になつて寝転がっている。

今日は、それ程暑くないし、廊下が冷たいせいもあるのだろう。寝苦しそうな様子は欠片もなく、ぬくぬくしてゐるような、へらへらしてゐるような幸せそうな表情で。

ふつと自然に頬が緩んだ。

「本当にここが定位置だなあ・・・。」

私は俺様天使に群がる小鳥たちに小さく微笑を零し、よつと本人をまたいで部屋に入り、お気に入りのタオルケットを取つて、ゆつくりとお腹にかけてやる。

小鳥たちは、やはりチラリとこちらを見てきたが、すぐに何ともないようすに黒々としたつぶらな瞳を閉じた。

「・・・おやすみ」

そつと囁いて、ふと視線をあげた先で、いつのまにかいた黒猫の煌々とした瞳と視線が交錯した。

珍しい、と逸らさず見続けていたけれど黒猫はすぐに興味を失つた。ようすに光沢のある闇色の体躯を反転させて森の中へ姿を消していく。

夕日がゆっくりと大地に飲み込まれていて、私は俺様天使とな
ぜか街へ下りていた。

向かい側から歩いてくる浴衣姿の女の子。クレープを片手にもう片
手にはリンゴ飴。

この時点で気がつくだろうが、私はさんざん嫌がっていた祭りにき
ている。

道路の真ん中では、きらびやかな衣装を纏つた老若男女さまざま
人々が笑顔で曲にあわせて踊っている。脇道でカメラを持つて写真
やカメラを回す人たち。

大きなスピーカーからは実況が聞こえてくる。

「あのふわふわしたの一体なんだ！？」

夜の道を照らす街灯の傍に赤い提灯がぶら下げられていたり屋台が
ずらりと道を彩るように並んでいる。

「おい人間！あのガキあれ食つてるぞ！！」

見知った通りなのに、なんでか今日といつ日だけはどこか違う場所に感じてしまう。

「つか食い物なののか！？」

からんこうん、からんこうん。

「よし、人間、いますぐ俺様にあれを献上しやがれ！」

はつきり言おう。私は今しみじみとこの瞬間、この祭りの熱気に溢れた雰囲気を堪能していたのだ。

「うつせえのはテメエだろ人間」

至極真面目な顔でそう言つてきた俺様天使に私は愕然とし思わず両手で顔を覆つた。

もういやだコイツ・・・・・！

浴衣の裾に注意しながらふらふらと例のあれ、つまりは綿菓子なのだが、の屋台に私は近寄つていった。

熱さに蕩けた砂糖独特の甘い香りが鼻孔を擦る。そして私は諦めの感情を多大に言葉に乗せて紡いだのだ。

「・・・すみません、綿飴一つください。」

その言葉を聞いた瞬間の俺様天使の満足そうな顔！きいあああ悔しい！！！！

そもそも、と隣で綿飴に食いついている俺様天使の手の中には、焼きイカやらトウモロコシ、たこ焼き、焼きそばなどが袋に入れてぶらさげられていた。

ちなみに私の手の中の袋には、一つのぬいぐるみとビニール製のぴこぴこハンマー、小さな鳥が飾らてるオルゴール、箱にしまわれたシルバーのネックレスが乱雑に押し込まれている。

ちなみにこれらのは、全て俺様天使が屋台で手に入れた物である。

射的、輪投げ、運試しの宝くじならぬ宝ヒモ。

射的は5発中、全てを使って最上段にあつたぬいぐるみを倒すし、輪投げも3輪中、2輪がぴこぴこハンマーの札と、ネックレスの箱に命中。

一番吃驚したのが、外れも多い中で一回しかできないのに可愛いらしいオルゴールを中でたことである。

「おおおー兄ちゃん凄いなーーー。」

と屋台のおじちゃんも吃驚しつつも言っていた。だけど、俺様天使はにやりと笑って当たり前だろ？？と偉そうに返していた。

・・・よぐぞ、キレなかつたな屋台の親父殿。

腕の時計に視線を落とすと時刻は7時をそろそろ刻む頃。それを確認して私は俺様天使の袋の中から、たこ焼きを取りだし口の中に放り混んだ。

「うん、美味しい。って何よ？」

「あー」

「・・・・・いや、自分で食べなよ・・・・・」

私の持つてるたこ焼きに視線を降ろしてから、俺様天使は私の方を見て雛鳥が餌を請うようにパカリと口を開けた。

微動だにせず、ひたすらその状況から動かなかつた為に私は諦めて口の中にたこ焼きを放りこんでやつた。

「ん、うめえな」

「・・・まつたくもつ。」

がっくりと肩を落としかけるが、いちいち反応するのも癪とこりが
りむしろ疲れるだろうと思つて止めておいた。

神社の境内で座っていたのだが、手にしていた袋を俺様天使の横に
置いて私はたちあがつた。

「ちよつと飲み物買つてくるから待つてて」

背を向けながらさう声をかけたのだが、身体が後ろにひかれて進もうとした足を引っ込めた。原因に視線をすらすと、左手が白い手に
掴まれている。

きょとんとして俺様天使を見下ろすと、やつは静かに、けれど焦つ
たように私を見上げていた。

「何？」

「行かなくても良いだろが別に」

「私、喉かわいたんだって」

「じゃあ俺様も行く」

「いや、すぐそこだよ。せり、あわ」。見えるでしょ？

「・・・・・行く」

「荷物あるし、まだ食べてるじゃんこなせこってば

「…………」

言い聞かせるように説得すると、むううと俺様天使はそっぽを向いた。

ひたすらに頭の上にはハテナマークで一杯である。

一体こやつはどうしたんだろうか？ぐるりと周りを見回しても、ただひしめくように沢山の人が祭りを楽しんでいるだけである。

・・・そう、沢山の人が。

あれ、まさか。

「こりで私は一つの答えに辿りついた。答えとこりよつは、一つの推測憶測に他ならないのだが。

「アンタがウロロウロしない限り、ちゃんとこりに戻るから」

迷子にはさせないから大丈夫だよ？ふつと頬を緩ませながら金色のふわふわの髪を撫でてみる。

「…………せつてえだな？」

「うそ」

「……待たせるんじゃねえぞ」

「うん」

「…………」

ふん、とそっぽを向いたままの俺様天使は掴んでいた私の左手を若干乱暴に離した。

（いつてくるね？）

（うさつさと行つてこいバカ人間やろー！！）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4608u/>

ANGEL&HUMAN

2011年11月20日05時40分発行